19世紀のアメリカ人が集めた

中国のマザーグース

CHINESE MOTHER GOOSE RHYMES

ロビン・ギル

19世紀のアメリカ人が集めた

中国のマザーグース

CHINESE MOTHER GOOSE RHYMES

ロビン・ギル

北沢書店

著　者

Robin Gill（ロビン・ギル）

1951年、マイアミ（フロリダ州）生まれ。
ジョージタウン大学（ワシントンD.C.）で国際政治学学位を取得。10年以上の在日生活。
編集・翻訳など著作業。主な著作に、英語と日本語の対極類型イメージを問い直す『英語はこんなにニッポン語』（ちくま文庫）、風土と文化の関係を探る『反日本人論―― a touch of nature』（工作舎）、自明『誤訳天国――ことばのplayとmisplay』（白水社）、1983～1988雑学エッセイ集『コラッむ』（同）、比較文化論の危険性を主張した『日本人論探険』（TBSブリタニカ）がある。

和訳唄・注釈

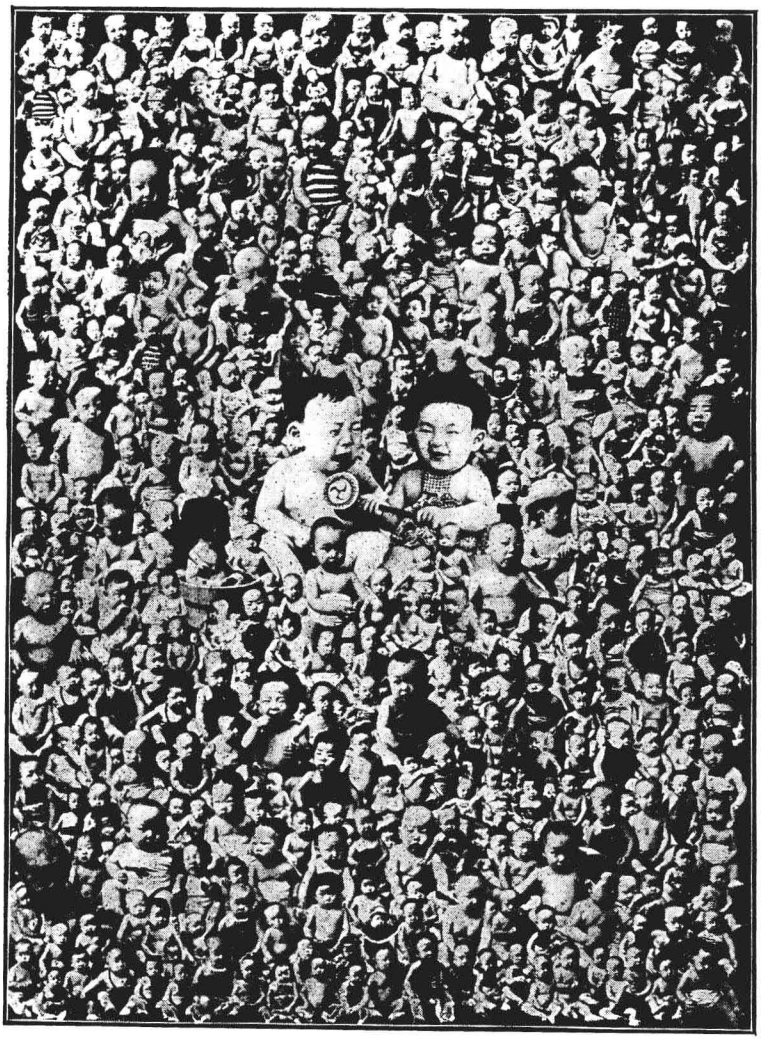
星野孝司（ほしのたかし）　東洋大学中国哲学文学科卒
マザーグース研究会会員
中国民話の会会員

企画・構成　**中村麻弓**

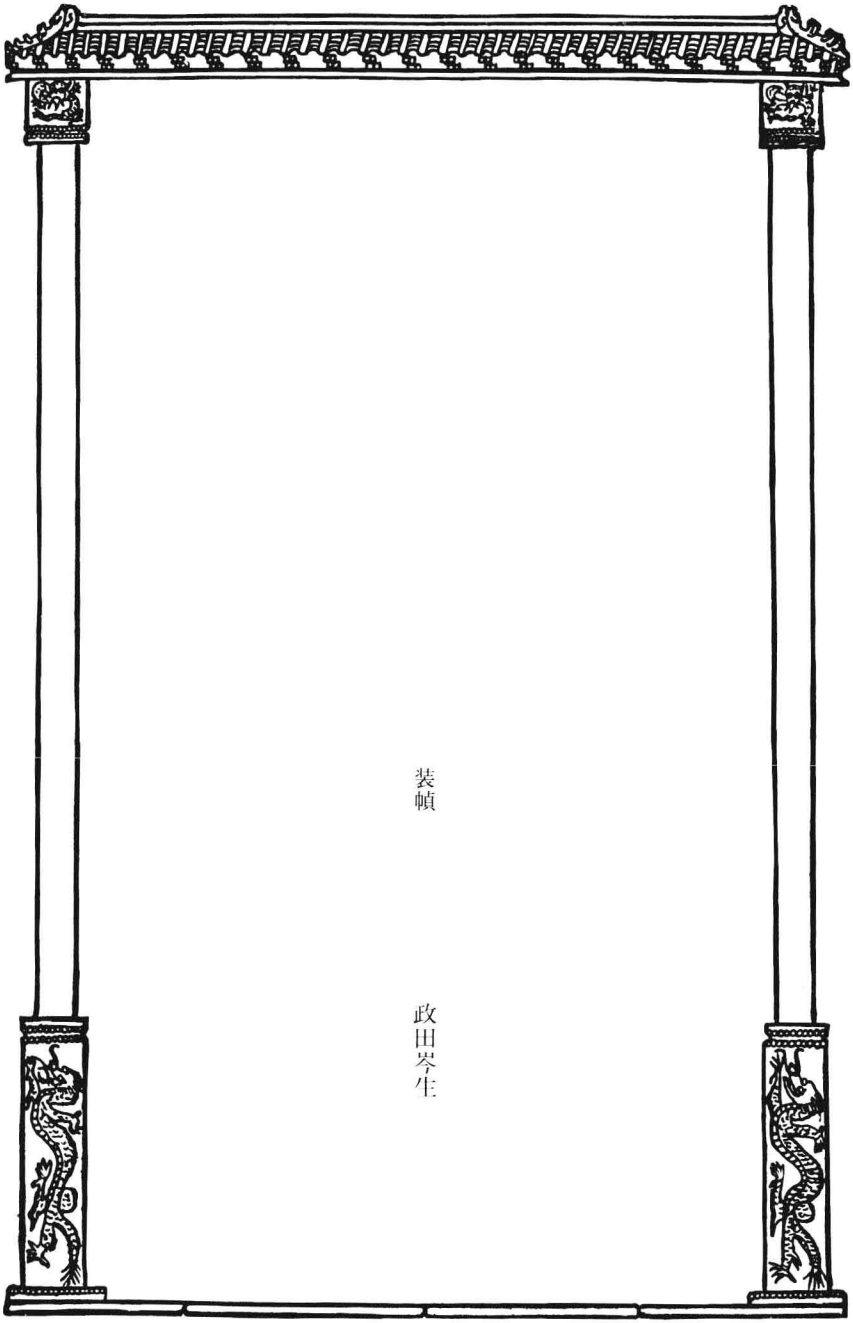
19世紀のアメリカ人が集めた
中国のマザーグース
一九九一年九月二十日　第一刷発行
著　者＝ロビン・ギル
装　幀＝政田岑生
発行者＝北沢恵美子
発売所＝株式会社北沢書店
発行所＝株式会社北沢図書出版
東京都千代田区神田神保町二―五
電話（〇三）三二六三―〇〇一九
振替東京四―五六四一一
印　刷＝共同印刷株式会社

ISBN4-87371-013-8

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



LITTLE ORIENTALS



裝幀

政田岑生

この本の内容

◆原　唄　十九世紀末の中国でうたわれていたわらべ唄の魅力に惹かれて、I・T・ヘッドランド牧師（米＝1859～1942）が採録したものから一〇五首を厳選。

◆英語唄　ヘッドランドの英訳。英語のマザーグースにも似た耳にやさしい脚韻訳。

◆和訳唄　星野孝司訳。原唄への理解を主な目的とした、中国語からの和訳。

◆写　真　ヘッドランド撮影。一九〇〇年にニューヨークで出版された原書 *CHINESE MOTHER GOOSE RHYMES* Fleming H. Revell に掲載された写真を転載。

◆エッセイ　唄一首に一編。ロビン・ギルによる、解説という枠を越えた日本語書き下しエッセイ。

◆脚　注　星野孝司による、原唄理解のための補足情報。

◆あとがき　著者ロビン・ギルの原書との出会い、東西脚韻論など。

小寶貝冰糖加梅桂
小貝寶桂花加小棗

SWEETER THAN SUGAR

MY little baby, little boy blue,
Is as sweet as sugar and cinnamon too;
Isn't this precious darling of ours
Sweeter than dates and cinnamon flowers?

ぼーやは
良い子
梅干し飴の
甘えっ子
良い子は
チービさん
小ナツメお菓子の
おチビさん

英米人なら誰でも知っている唄によれば、女の子は――Sugar and spice, and all things nice 砂糖や香辛料やあらゆる可愛いもの――によって創られ、男の子は――Snakes and snails and puppy dog tails 蛇や蝸牛や犬の尻尾――たるものに属すそうです。幼児の性別を無視する民族もあるが、古き良き（？）我が米国では生れた時点から（混合しないように？）男の子をボーイとし、女の子をギャルとする訓練が始まる。

「あの色大ッ嫌いなのに！」と、男の赤ん坊用のスカイブルーとは対照的な、女の赤ん坊用のピンクの足首輪を、無理矢理着けられた、「利婦（リフ）」すなわち女性解放家のロビン・モーガン女史は憤慨する。もちろん美学上の問題ではない。英米でも男の子は普通、女の子より大事にされてきた。が、それは〝勇者のタマゴ〟としてであり、Sweet（甘い・優しい）なピンク色の存在として甘やかされたわけではない。だからこそこのような坊や礼賛唄の暖かさは目立って珍しい。

日本では「甘い＝良い」という形式はあまり見当たらないが「この子可愛さ限りなし…」という唄などでは「甘さ」という質じゃなく「…天にたとえて星の数　山じゃ木の数萱の数　七里ヶ浜では砂の数」*と「ものの数」という量に転換されているようです。

アンミツ　アメに　アンコのパン
坊や吾が宝児　甘いじゃん！（スパイスの少ない日本のための異訳）

＊『日本まざあぐうす』　谷川俊太郎編　毎日新聞社　1982

清代の大ヒット長編小説『紅楼夢』の、眉目秀麗・美少年の主人公、賈宝玉の台詞に

女の子は水でできた身体／男の子は泥でできた身体

というのがあります。この人は男嫌いだからこんな風に嘆くわけだが…。

赤ちゃんや幼児を「小宝貝（シャオパオペイ）（宝物）」と歌う。次句の「貝宝」は音の目先を変えるのに漢字をリバーシブルしたわけで、歌には良くある手法。「貝は海の胎児である」とは誰の詩句だったか。

「桂（クイ）」は本当はモクセイの花の類。乾燥した花片は、お茶にお菓子に料理にと、香りを添えるのに良く使われる。

㋺本家マザーグースの名唄'Little Boy Blue'（ブルーバード）から拝借した「ブルー」とは？　青い空や青い鳥のように、すがすがしくハッピーで陽気なということ？　またはTrue（愛などに忠実）と結びついて信用できる「良い子」のこと？

同じブルーが、陰気、暗い、重苦しいという意味を持つ点は、さらに面白い。ブルースという音楽よりは、陽気な楽器音楽（インストロメンタル）に猟犬（ブルーという名も多い）の淋しい遠吠えのような歌声をあわせた「ブルーグラス」という音楽の方が、当語の記号的両面性をうまく生かしている気がします。

㊟㋺はロビン・ギル、㋭は星野孝司の注釈、以下同。

小脚兒娘愛吃糖
沒錢兒買
搬着小脚兒哭一場

LITTLE SMALL-FEET

THE small-footed girl
With the sweet little smile,
She loves to eat sugar
And sweets all the while.
Her money's all gone
And because she can't buy,
She holds her small feet
While she sits down to cry.

ちっちゃな
アンヨの
お嬢ちゃん
飴玉なめるの
好きだけど
お金なくって
買えません
ちっちゃい
アンヨで
よーちよち
たーだ泣くだけよ

この英訳はただ素晴らしい。原文の「小脚」には「可愛い」のニュアンスもあるはずだから、そこに「sweet little smile――控え目な微笑み」が加わり、さらに雰囲気を高めてくれる。しかも足をつかみながら泣くということを、原文よりも写真から閃かせる行為は絶妙。

纏足だから痛い。纏足だから…と意識はどうしてもそこへゆきがちだが、子供というものは身長低く、身体も良く曲がる――つまり「足」により近い存在。それに「頭」一辺倒な大人の精神に未だ毒されていないから、「頭を抱えて」泣く大人と違って、泣く時もしばしばこんな風に泣く――ストンと座り、足を抱えて、あるいはただじっと足を見ながら。

それはチビッ子ならではのしぐさだけに、あるいは首から上だけではない、全身的な純粋エゴイズムの表現だけに、愛嬌たっぷりに感じられるのだ。

おまけに英文全四行「弱**強**弱弱**強**弱弱**強**弱弱**強**」という韻律で見事に通しているから歌いやすい。バラード・小唄・ラップ…なんでもかんでもにすぐ乗せられる、サービス心満点の訳文である。

原書にあったもう一編の唄"Little Bound Foot"「チビの纏足ちゃん」には、纏足の意味合いが厭というほどはっきりと表現されている。外に出てはくすねたお米でゴマ（のお菓子）を買うお転婆娘…お母さんすら「不能管（ロスト・コントロール）」だが、纏足のおかげで「好（よい）」子に変身してしまうのだ。

「糖」はアメ。Sugarというよりcandy。しかし中国では甘いものをひっくるめて「糖」ともいう。

「小脚儿娘（シャオチャオニャン）」の「娘（ニャン）」は既婚の女性を指す言葉だからちゃんと訳すれば「小っちゃい足のおかみさん」になるだろう。

童謡では女の子をあやす時に歌う唄。また「纏足（てんそく）」の奥さんをからかう唄。女の子の唄の中でも一、二を争うメジャーな唄でもある。

「纏足」は幼時から足を布で締めつけて小さく整形するという昔の風習、過度な人は家の中でも伝い歩きしかできなかったそう。中国女性の美観の一つであったこの「纏足」は、近代になってとかく女性を家庭に縛り付ける因襲的な悪癖の代表と真っ先に批判された。とはいえそれ以前から

大脚大　大脚大／陰天下雨不害怕／大脚好
大脚好／陰天下雨摔不倒（でかい脚でかい丈夫ダヨ／雨が降ってもへっちゃらサ／おっきい脚やいいな／雨が降っても転ばない）

こんな「天足」（纏足してない・自然のままの足）のお嬢ちゃんの魅力を歌った唄もあったが。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

THE CRICKET

ON the top of a mountain
A hemp stock was growing,
And up it a cricket was climbing.

I said to him,
"Cricket,
Oh where are you
going?"
He answered: "I'm
going out dining."

高高山上一顆蘇
有個吉了兒往上爬
我問吉了兒你上那
他說渴了要吃蘇

たかたか山に
麻いっぽん
セミがよじよじ
よじのぼる
セミさんなぜなぜ
なぜのぼる？
もちろんゴハンよ
アサだもん

たった数百年前は、眼が一つ額の真ん中にある人間とか、千年も長生きした人間などがいると信じられていた。Once upon a time――「昔々」ではなく、今日現在でも存在しているかも知れないと思えるだけ広い世の中でした。大地の向こう側を知るすべのない時代だったから、オトギ話に必要な時間の隔たりと空間の隔たりの両方の要素が、まだ平等だったわけ。

「昔々」が一、二世代前で足りるように、空間的にもわざわざ「遙かに遠いところ」まで行かなくても良い場合もある。お化け話なら、同国の森林で充分用に足りるでしょう。あるいは人跡疎らな「高高山」でも……。

もともとこうした「山」と「原生林」は同一視されてきたが、何時からか坊主頭の山が登場して――とどのつまりチビッ子や牛（十九頁）さえ現れる〝家畜化された〟、あるいはペット化された山に落ちてしまった……。

子供には虫の食欲が良く理解できるのでしょう。「葉っぱを破壊しているのではなく、食べているのよ」という考え方は、大人より子供の方が受け入れやすい。

高々山のてっぺんには
麻が一本　はえていた
登ってゆきますセミさんの～
登ってゆくわけ言ってごらん
きまって食べたいよアサ御飯

英語の虫（cricket＝コオロギ）と中国語原文の虫（吉了儿＝セミ）は、虫眼鏡で見なくても種が違うことにちょっとこだわってみよう。

ヘッドランドが参照した筈の *CHINESE FOLKLORE PEKINESE RHYMES* (1896) には吉了儿＝蜩螿儿＝cicada とある。cicada を辞書で引くと、米＝コオロギ／英＝セミ（米ではセミを locust と呼ぶ）となっている。そのためヘッドランド氏が勘違いしたものか。また、ロビンは次のような推理をしている。cicada は学術用語であるため、一般の英米人、子供たちにも親しみやすい cricket に変えたのではないか。locust にしてしまうと、地下に棲み畑を丸裸に喰いつくしてしまう旧約聖書の黒いイナゴの大軍という陰気なイメージがある。一方、cricket は英米両国で陽気で元気なシンボルとなっている。わらべ唄では常に fiddle（民俗バイオリン）を弾く人気者だ。そして多くの地方で幸運の虫（家の中で殺したら不吉）とされているから、原文の「吉了儿」にピッタリ。

いずれにせよ、原文はセミを示している。

英語学者・市河三喜の随筆集『昆虫・言葉・国民性』（昭和17　研究社）によれば、英国には鳴く種類の蟬がいないとある。アメリカで鳴く蟬（locust）を初めて見た移民が、イナゴの類いが木に登って鳴いていると思ったという逸話もある。また俗称を tree-cricket とも言うそうだから、暗にここから cricket の英訳が生まれたのかもしれない。

蝴蝶飛我不追
蝴蝶落我不要

THE BUTTERFLY

AWAY goes the butterfly,
To catch it I will never try;
The butterfly's about to 'light,
I would not have it if I might.

ちょうちょ
飛んでこい
おいかけない
ちょうちょ
下りてこい
つかまえない

蝶々ほど短詩にふさわしい対象は少ないだろう。その不動なる兄哥の「花」同様に、儚さそのもの。

英語のマザーグースの蝶々唄といえば

I'm a little butterfly　我輩小さなバタフライかな
Born in a bower, Christened in a teapot　木陰の生れ　茶びんの洗礼
Died in half an hour　半刻経たずにお亡くなりだな

一度読んだこっきりだがはっきり覚えている英国の詩人ドン（John Donne 1572—1632）の言葉に「人生が短くとも、つとめてそうする必要はない」（Though life be short, let us not make it so）というのがある——つまり一夜の夢だとて捨てたものじゃない。むしろ儚いからこそ大事に、大切にしなくちゃと言っても良い。だからこそ——

蝶々蝶々飛んできな！
捕まえない方が素敵だ

英訳も優雅な、立派なエコロジー教訓唄になっている。それとも君子は蝶々などの微々たるものに対して騒いではならないなどというつまらない教訓かな。

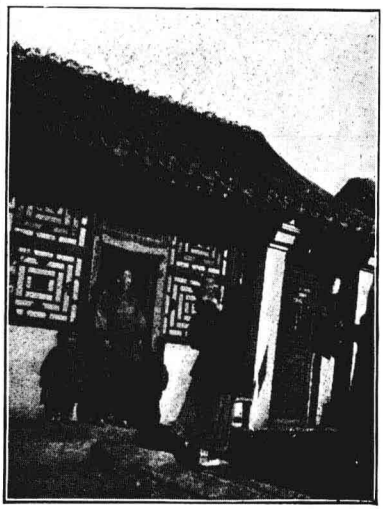
（駄足＝英訳の light は alight＝（上から着く）の省略。韻律のために）

「ちょうちょう」は外来語である。その証拠に「蝶」という字には訓がないではないですか。も一つ——童謡「ちょうちょ　ちょうちょ　菜の葉にとまれ…」の曲もドイツ民謡（スペイン民謡という説もある）である。この唄は、たぶん野原で蝶々を追い駆けながら歌う唄。それとも蝶々ウォッチングをしながら歌う唄。

㋺中国の詩は古来からこのような「対句」という技法を保って来ました。そうした二行の対称性は単に韻律をそろえるだけではなく「視覚的な韻律」の追求でもあったといえるでしょう。これはその好例。

㋩「聯」は、現代でも中国家庭の玄関先に、お寺の門柱に、必ずと言って良いほど貼り付けられている、左右二連、破邪吉色の赤紙に墨跡痕痕と書された目出度い詞句。まさに生活の中で生き続けてきた視覚的な…「見るための韻律」。

㋻また、「韻」を「陰」にたとえてこの唄のパターンを『易』で読むと卦は䷸巽でしょうか。「入る、謙遜…巽は少し亨る。大人を見るに利あり…迷って損する」でこの唄にピッタリ。



養活猪吃口肉
養活狗會看家
養活貓會拏耗子
養活你這丫頭作甚麼

OF WHAT USE IS A GIRL?

WE keep a dog to watch the house,
A pig is useful, too;
We keep a cat to catch a mouse,
But what can we do
With a girl like you?

ブタを育てりゃ
肉食える
イヌを育てりゃ
番させられる
ネコを育てりゃ
ネズミが捕れる
ムスメ育てて
何になる？

英訳は未来型の「女の子は何になるか」ではなく現在型だ。「おまえみたいな女の子が一体何の役に立つ？」と。そのおかげで中国の女の子の特別な事情（下記参考）とは関係無しに共感が得られる。男の子であれ女の子であれ、チビッ子はやはり、家事世事に役立つはずがない。無論テレビなど無かった時代には、チビッ子たちには大人の退屈を紛らわす、無比のエンターテインメント・ヴァリューがあった（文化人類学者の行なった調査によると、いわゆる未開・伝統社会では大人の性別を問わず「子供と遊ぶ」のがもっとも人気のあるレジャー活動であった）。自分が寄生物だというこの唄の告発に対して「いや、あたしにだって鑑賞動植物程度の価値はあるでしょう」と答えてもよかったわけ。

「他人のために女の子を育てるのはご免だ」という中国人の態度を、その利己主義、不人情の表れであると批判したがる者に対して別著 *CHINESE BOY AND GIRL* の中でヘッドランド氏は当時の庶民のキビシイ生活状況を弁解。

いずれにしても、唄の「意味」より、歌う人の声の調子に敏感な幼児にとって理屈なんてどうでも良いことである。自分が軽くからかわれているくらいは分かるに違いない。あるいは分からなくとも子供というものは――読み方によって――例えば怖い声で「この子大好き」といえば、きまって泣き出す。一方、甘い声で「坊やを殺し、肉ダンゴにして食ってやる」とか「女ゴを焼きアナゴにするぞ」と嚇してもチビッ子は安心するものである。

しかし、他の唄にある、「爸也哭娘也哭（とうさんもなくかあさんもなく）」「媽媽哭壊了（かあさんなきくずれた）」のフレーズから見ると、いずれ来る離別の辛さゆえの反語とも受け取れる。

幼い女の子をあやしながら口遊ぶ唄。

中国では一般に、女の子の誕生は男の子のそれほど祝福されるものではない。

杜黎樹　開白花／養活閨女做甚公／養活小子拾柴木／閨女是个賠錢貨！（ナシの樹白い花／娘育てて何になる／男の子ならマキ拾い／娘じゃたンだの金食い虫よ！）

…つまり家も継げず、将来の労働力としての価値も男の子に比べれば低い上、嫁にいくとしても（持参金などのために）金を食う、と女の子を育てることはパール・バックの『大地』（*The Good Earth*）に余さず描かれた通り、貧しい農村などでは女の赤ん坊の間引き「溺女（ニーニュウ）」も売買も、半日常の習慣だった。

この頃は伝統的な子守唄の中でも代表的なものの一つで、中国における女性解放運動が論ぜられる際には、近代前の女性の地位を端的に語るものとして、必ずヤリ玉に挙げられる唄でもある。

THE FIRE-FLY

FIRE-fly,
fire-fly,
Come from
the hill,
Your father and mother
Are waiting here still;
They've brought you some sugar,
Some candy and meat,
Come quick, or I'll
give it
To baby to eat.

火蟲兒火蟲兒
你下山兒來
你爺你媽
給你帶肝兒來

ほたる　ほたる
山おりて来いよ
とうさん
かあさん
おみやげ持って
くるよ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com